

米家泰著作

『中・近世山村の景観と構造』

藤 田 佳 久

一

本書は中世近世における日本の山間の村々に関するこれまでの多くの研究成果に対してレビューをするとともに、そこに示されてきた「山村」像を問い直してみようという、ある種の大胆さとそれを押しすすめようとした意欲作である。

従来、山間に位置する村々が固有性を有してきたかどうかについては、多くの研究者が様々な現象や視点から論じてきた。とりわけ、戦前、柳田国男が初めて山間に住む人々を「山人」と称してその固有性を論じ、それに関するいくつかの諸問題を提示したことは、その後の研究者に山間の村々に対する好奇とロマンを与え、異界を追い、それにふれたいとする学問的な刺激を与えた。

そのことは、昭和期に入ってもなお日本人同士がまだ十分に国内を知らなかったという状況を物語っているとともに、同時期に行した鉄道網の拡大や整備、それに全国の実測地形図の完成などがそのような新たな好奇心を満たすことを可能にしたという局面もあった。好奇心の対象は山間、とくに山奥の村々だけでなく、島嶼や海岸の村々へも及び、研究作品だけでなく、紀行作品にもな

って、さらに人々の関心を高めた。

それはかつてヨーロッパ人が航海術と地図作製術を手に入れて世界へ飛び出し、「地理的発見時代」をもたらした状況と類似し、いわば日本版地理的発見時代ともいつてよい時代であった。

ところで、ヨーロッパ人に「地理的発見時代」をもたらした大航海の船にはやがて地理学者など研究者も同乗し、異界とみなされた新発見地域の民族や文化、生産物、動植物などの調査結果が本国へもたらされ、近代科学の基礎材料をもたらすとともに、それがのちに植民地獲得競争へ突入していったことはよく知られている。

日本版地理的発見時代も同様な側面があり、現地入りした研究者が思い思いに記録し、折から少しずつ定着しつつあった洋学からの視点も加わり、新たな学問領域や方法論が試行された。そこでは対象となった村々を異界とみるか、単なる時系列的な断面とみるかによって対象自体の見え方が当然異なっていた。

戦前の異界さがしブームは臨戦体制下で中断するが、それは戦後の高度経済成長期以降に再現された。その背景には研究者側も経済的余裕の中で日本文化論を自問する余裕をもち、また急激な都市化にともなう山間地域からの人口流出の問題地域としての山村の浮上があった。それはヨーロッパ人によって生み出された植民地の舞台と相通じるものがあり、急拠編成された都市側からの一方的見方による研究材料の収集が図られた。自治体史の作成やダムによる水没地域の緊急調査、それに多くの行政調査などが行われたが、それらに参加したのは都市側の研究者であり、その視点も異界論と非異界論が併存していたようにみえる。

そんな前者の例には民俗学の多くがあり、環境論をベースとする地理学の中にも異界論がみられた。とりわけ民俗学による異界論はきわ立っていた。それに対して、後者の例にはもっぱら文献を頼りに対象を位置づける歴史や村落社会論の枠内で把握しようとする社会学などがあつた。極端にいえば、前者の超時間的世界としての把握に対して、後者の時系列的ズレとしての把握という二つの視点であり、山間の村々やその空間はそのような二つの視点が重なる場でもあつた。当然、両者の間には、方法論を含め理論的枠組みの違いがあり、両者の視点は相互に混じりあうどころか交叉することもないに近い状況にあつたといえた。

二

やや前置きが長くなつたが、本書の著者はこの両論の間隙を歴史地理学の立場から埋められないかという点に主眼をおいている。両論間では、アプローチの方法や概念などが不整合であり、違つた方向性の座標軸をもっている。それを同一の座標軸上に統合しようとする著者の意図は、それがなぜ必要なのかという問題も含め、それゆえに大胆であり、野心的だということになる。それが成功したかどうかを問おうとしたのが若くして本書を出版した著者の意思のあらわれであろう。

ところで、違つた座標軸を統合するには当然いくつかの作業が必要になる。

著者はその作業方法として既存の研究成果の見直しと、そこで用いられている概念の見直しを図つた。その見直しには当然ある種の作業仮説が必要になる。第一章はその仮説を論じた部分であ

り、本書の論理的枠組みの基本にもなっている。

仮説の一は、山間の村々での固有の生業が縄文時代以来の狩猟・採集・焼畑、畑作と一貫した系譜で説明されてきた従来の研究成果に対して、縄文の生業はかつて平野部にも存在したのではないかという疑いなどから、従来の系譜を見直し、それら山間の村々の文化が明確になつたのは石高制実施後の近世以降ではないかとした点。

仮説の二は歴史的政治体制と「山民」との関係に注目し、連続した筈の山間での居住者と新たな参入者との関係、従来重視された近世初期の山間の村々での一揆論などの研究成果を読み返し、中世と近世の間に山間の村々に対する政策転換が林政を軸に行われたのではないかとする点。ただし、この第二の仮説も第一の仮説と関係しているが、中世における山間の村々への視点がまだ必ずしも明確ではない点も含め仮説らしさをもつが、それほど新鮮な仮説ではない。

仮説の三は、プロトタイプとされた「原始山村」と近世以降の山村の林業生産の浮上の間に、近世以前の生業の多様性が近世以降の商品経済化の中で特化傾向を示し、それが人口扶養力を支えたりしたこと、近世以降とそれ以前に境界があるとする点。しかし、この仮説の三はそれ自体はすでにあらためて主張するほどの新鮮さにはならないように思われる。

以上、著者の論理はこの三つの作業仮説にまとめられよう。そのうち第一の仮説に第二と第三の仮説をからませることにより、従来、「山村」としてイメージされ、概念化されてきた異界論は、近世に入つてからの所産であり、「内なる異地域」として他地域

から識別されたこと、近世になって使われた「里方」に対する「山方」の認識呼称も以上の論点に符号するとする。

つまり、著者の最大の主張すべき論点は、これら三つの作業仮説の組み合わせによる総合性にあり、これら三つの作業仮説の組む各軸を示し、全体として三次元の座標軸を構成させる形で展開しようとしたものといえる。各座標軸上にはそれぞれの既存の研究成果が多様な意味論として浮上したり沈下したりする。その浮沈を裁くのが各座標軸の基準軸で、それ自体が中世と近世との境界線を示している。研究成果の浮沈はこの境界線の基準となる時間軸でふり分けられ、配列されることになる。最初にふれた二つの論、つまり異界論と非異界論をこの時間軸で仕訳し、統合しようとする論理である。

したがって、当然仕訳しにくい分野や成果も存在し、その処理をどうするかという問題も出てくる。著者はそれを読み替えたり、批判しながらこの座標軸上でふり分けることでその問題を乗り越えようとしている。しかし、そこには当然の如く、著者の仮説から発する推論が多用され、推論をベースとした論理にもつながりやすくなる。それを本来乗り越えるのは、著者自らの着実な実証研究により、推論の幅をなるべく小さくすることが必要になる。今後このこされた課題の一つになろう。

ところで、前述したように、仮説二と三はあまり新鮮さを感じないだけに、この仮説二と三は座標軸上での研究成果の浮沈理は比較的うまくいくように思われる。

それに対して、仮説一は評者にとつても最も新鮮に思われる。恐らく著者が最も主張したい座標軸でもあろう。したがって、仮

説一がうまく説明できれば、仮説二と三がかなり自明の部分を含んでいるだけに、仮説一、二、三が連動して立体的な山間地域論が浮かび上ることになる筈である。もちろん、仮説二の中の不確定な部分である中世の山間の村々の性格論については、今後もさらなる研究の蓄積が必要であり、それ次第では仮説二が成立かどうかにかかわる余地もある。著者がこの点について各論中で若干の研究を紹介しており、それについてはこの課題に挑戦中として評価したい。

以上から、本書の論理構造がわかってくるが、くりかえせば仮説一の座標軸上での展開こそが最大の課題であり、もつとも力を入れるべき点であるように思われる。仮説一の座標軸には多くの超時間的異界論の世界を説く研究成果が並んでおり、その浮沈を整理するのはそんなに容易なことではないからである。

しかし、先走って言えば、以下の各論でこの仮説一の解明を試みるべく正面から取り組んだ論考はみられない。それは筆者が巻頭でも述べているように、本書が基本的には既存の研究の読み替えやレビューにより、前述のような視点を貫こうとしたためであり、それが既存の研究成果の枠内でしか対象を取り扱えないという限界性が含まれていると同時に、筆者が最も重要だと考えた仮説一の座標軸上の展開を著者はあまり重要視していなかったためであろうか。例えばそうだとすると、この点は著者自らが自分の脚でかせいだ研究によって今後克服して欲しいと願いたい。

三

以下は各論構成についてである。各論はそれぞれすでに発表さ

れた論考の集大成である。内容は多岐にわたり、中には村絵図の山容描写など本筋とは直接関係しないと思われる論考も含まれるが、基本的には山間地域や山間地域へのまなざしが近世に入ってから議論されている諸問題を発生させたという論点に収斂する(筈)とする論法をとっている。それが前述したように著者の論理である。

以上の具体的手段として、当然まず中世における山間地域の特性が説かれることになる。著者はそのために第二章「中世山村と山地空間——土佐国大忍莊横山における名の領域と空間認識——」第五章「熊谷家伝記」にみる開発定住と空間占有——中世を回顧する近世山村民(その一)」、第六章「大和国吉野川上流域における「由緒」と自立的な中世山村像——中世を回顧する近世山村民(その二)」と三編を用意している。

そして近世の山間地域については第三章「大和国吉野郡川上郷井戸村における近世前期の畑作景観——文祿検地・延宝検地を中心に——」、第四章「大和国吉野川上流域における焼畑の出入り作と「村領」について」の二編を用意している。

しかし、以上の章の順番からも知られるように、第二章で中世の山間地域を論じたあと次章と次々章では近世の山間が論じられ、そのあと第五章と第六章で再び中世の村々への言及があり、前述したような論理構造の展開を期待して読み続けたい読み手としては、少々混乱させられるところがある。これは第二章、第三章、第四章が村々の領域にこだわり、領域論としてまとめようとしたためかと思われるが、そのようにみたとしても第三章の内容は直接的には領域論につながってはいない。第三章は前後の章のつな

がりからみると異質の存在のように思われる。

ところで、この第二章と第四章の村の領域論は本書の論理構造の仮説二の座標軸(政治と支配)の一部をなすものと言える。

後半の第五章と第六章は、近世における山間の村々の人々の中世への回顧記録の中に読みとれる中世の山間の村々のイメージを浮かび上がらせようとした論考で、その延長に終章である第七章「地方書にみる近世の村落類型観——里方・山方・浦方——」が位置づけられている。この連続した三論考は軸としてまとまりをみせ、内容的にも面白く、著者が最も主張したい論理が示されている。これは仮説三の商品生産にかかわる座標軸であるが、著者の主張する内容からみれば仮説二の近世の山村政策にかかわる座標軸のウエイトの方が高いようにもみえる。各仮説はそれぞれ独立的ではなく、ある局面では相互に強く関連しているケースもあるのは当然である。

このように各論の展開をみると、少し個別的配列を含みながらも、中世と近世の村領域論、および近世山間の村々の人々の中世の山間世界へのイメージ論の二論から構成されている。その内容からみれば仮説二を中心に、一部仮説三を含んだ事例研究の展開ということになり、仮説一の検討はほとんどない。著者が巻頭で展開した論理構造にかなり濃淡の差がみられることになる。それだけに濃淡差を埋めつつ、さらに各座標軸の基準を確実にする研究を今後も期待したい。

四

最後に各論の内容についてごく簡単に紹介し、評者の気付いた

点をコメントしてみたい。まずは領域論である。

第二章「中世山村と山地空間——土佐国大忍莊横山における名の領域と空間認識——」は著者の中世山間の歴史的地域についての実証的研究である。評者もかつてこの一帯へ出かけたことがあり、なつかしさを感じる。

本章は本書の中で唯一中世の山間の村々を正面から把握しようとした事例研究である。それも当時の名の領域を地名の比定をしながら近世の複数の写本から引き出し、中世の名の領域の分合や分割が近世の村域になったと推定されること、境界の記録から尾根や谷など地形が境界とされ、集水域単位の空間認識もしていたと推定されること、その背景には名を単位とした耕作化の進展があったためではないかとしている。山間地域での名の境界をこのような方法で明らかにしようとした点は近世以降の山間村落の存在形態をみる上でも関心をもたれる研究だといえるだろう。

ただ、近世以前において名領域がどの程度まで山間地域をカバーしていたのか、またカバーするだけの必然性があつたのかは明らかではない。近世に入ってもなお山間地域では飛地的開発がすすむなど、山間地域が村々の領域によって埋め尽くされてはいなかった事例は多いからである。また名による領域がどのような内部の構造が反映した形で形成されたかも解明されているわけではない。そして、それ以上に素朴な問題として、一般に山間の村々のうち、外帯のような急峻な山地での集落は、凸地に立地するケースが多いことからすると、尾根筋が境界線になったり、集水域の地形単位が領域単位になっていたとする発想には観念的な臭いがあるがどうだろう。

この中世の領域論を近世へと延長して検討しようとしたのが第四章「大和国吉野川上流域における焼畑の出入り作と「村領」について」である。読み手側からすると、第二章で扱った土佐横山における近世での領域論を展開してもらえたら、中世と近世の時代比較がもつとはつきりと示せたのではないかと思う。異なった舞台での展開は異なったモノグラフになってしまいがちだからである。

とはいえ、著者は吉野林業が展開することになる焼畑地をめぐる、その出作とそれをめぐる論争を村史の史料をベースにして詳細に論じ、一八世紀初頭に至る一世紀くらいの間に作慣行があり、その出作側の持分意識の浮上が争論の背景になったこと、また焼畑後の植林もそのような意識を支えたこと、一時的な焼畑ゆえに出入作は村境をこえることが容易であつたこと、そして年貢の納入が出入作の認識を強め、村境の意識も高めたのではないかとする。

ここでは出入作が既存の村境意識を高めたことに結論が置かれているが、その既存の村境は所与とされ、その近世村境がどのように形成されたかという分析ではない。出入作は山間の村々だけの現象ではなく、平野部でも広くみられ、農地改革以前の地主小作制下の農村でもなお著者のいうように出入作自体の認識の中に領域意識が連綿と続いていたことが知られている。その意味では出入作は地上権としての認識であり、村領域形成時から存在した事象といえ、それを相互に是認することで原初的村領域の形成が可能だったのではないかと評者はみる。その限りでは近世に連続した中世の村の領域形成はその原点として認識できそうに思うが

どうだろう。

第五章「熊谷家伝記」にみる開発定住と空間占有——中世を回顧する近世山村民（その一）——は三遠南信国境地帯の中世から近世にかけてのいわば同族史を記録した「熊谷家伝記」を取り上げ、記録者を近世の編纂者とみて、編纂者の編集方針を読み取りながら、編纂者によってイメージされた中世の山間の村々を浮かび上がらせようとしたとするもう一つの論である。

同伝記は地元の山崎一司氏の努力で新たに読みやすく復刻編纂され、長野県では小学校の副読本にさなっている。同伝記は写本を含み、内容の真偽のレベルについての議論があつて、地元の町史の中ではすでにきわめて詳細な検討が加えられている。評者も二〇年あまり前に同伝記に関心をもったが、その内容については以上の理由で深入りできなかったことがある。

そこを前述のような視点で著者が踏み込めたのはそのような既存の豊かな研究蓄積によるところが大きいし、その視点は面白い。著者は同伝記のストーリーをいくつかのステージに分け、落人伝説起源の開郷記録に、無人の山野への開拓者としての創作性への推理と、そこに描かれようとした編纂者による領域支配の正当性の主張をかきとり、近世人のみた中世認識を示そうとしている。前述した二章の領域論とも交叉させようとする著者の意図もうかがえる。その点に、従来も同伝記に創作性を感じてきた既往の研究と一味違う点があるといえよう。

ところで評者はさらに踏み込んで、落人伝承それ自体も創作ではなかったかとみる。落人伝承は恐らくは平家の落人伝承などを売りつける近世系図書き屋の流布する中で、落人伝承自体への憧

れがこの伝記の編纂者の中に存在していたのではないかと思われる。それは今日のこの地域における熊谷姓やそれ以外の姓の分布の中にみられる混じり具合からの推定による。それにしても、同伝記の村々はなぜ急峻な天竜川河谷にだけ集中したのか、その背後の緩やかな丘陵地を占めた関氏の領域との棲み分けをどう説明するのかを考えると、同伝記の領域論は非落人説も含め、もっと視点を変えることもできそうである。

第六章「大和国吉野川上流域における「由緒」と自立的な中世山村像——中世を回顧する近世山村民（その二）——」も第五章と同一のアプローチで、近世の山間の人々の由緒書の中から浮かびあがる中世の山間の村々のイメージを把握しようとした作品である。

ここで用いられた由緒書は、近世に書かれた多くの減免嘆願書などの中に記載された内容をベースにしている。それらを時系列的に、また主体別に整理する方法をとっている。

その結果、個別的内容が次第に共通化し、あわせて個別地域が流域全体へと拡大し、地域のアイデンティティが形成されたこと、内容的には中世の同地域が独立的で自立的な世界であったとするイメージを共有したこと、その背景には、この地域固有の南朝史や八旗八庄司公文の伝承などがあつたためとする。

しかし、嘆願をくりかえしても結局減免は認められず、それまでの自分たちの出自の中世の世界への陶醉から転換して山間の厳しい風土性の主張へと変わり、山間の地域的条件を認めていくことになったとする。

著者は以上のような方法で近世のこの流域の人々の歴史像や地

環境境像の認識の仕方を明らかにしたといえ、興味深い。この流域は自治体史を中心に文書類が数多く刊行されており、そのようなメリットを生かした研究成果でもある。

終章の第七章「地方書にみる近世の村落類型観——里方・山方・浦方——」は、いわば農山漁村としての認識がいつ始まったのかという視点で、関係する地方書の内容を検討することにより明らかにしようとしたものである。それは従来からの「山村」概念を含む村落類型論の見直しも意図したものである。

著者は今日の農山漁村の意味につながる里方・山方・浦方の用語に注目し、結論的には「村柄」的な村の認識ではあったが、近世に入ってから貢租設定にかかわる支配者側の発想として登場したとする。この点は著者のこの書的基本的テーマに関わる論であり、この書の「一応の」結論ともいえる。

ただし、ここで「一応」としたのは、著者自らがやっと最後になつて、これら近世の村落類型論、もちろん「山村」としての類型は、近代以降に確立し固定化された観念的視点の延長上の発想であるかも知れないこと、その点では既存の観念上から自由になれなかったかも知れないこと、という虞れの吐露に評者も理解を示したいからである。

もしそうだとすれば、中世近世の山間の村々にこだわって展開してきたこの作品も白紙へ戻さざるを得なくなるだろう。しかし、同時にそこに山間の村々の姿をさらに新たな視点から描き出せる可能性が十分生じてくる。

著者のいうこの虞れの論点は、本来この書が巻頭で堂々と野心的に主張した筈のものであったのではないか。それが結局、最後

になってまた元の論点に戻る見解を示したことは、この書が必ずしも当初の目論見通りにいかなかった虞れを示したともいえるだろう。

とすれば、その最大の理由は、評者が前半で言及したように、本書が論考の構図だとして示した三つの仮説のうち、各論考はすでにより自明と思われる仮説二と一部仮説三の軸上に展開し、最も新鮮で、最も挑戦的と思われる仮説一の論考を欠いたことによるためだと思われる。それだけに、くりかえすことになるが、巻頭で著者が熟っぽく記した仮説一にあたる座標軸上の論証を自らの脚と手でぜひ開拓してほしいものである。著者がこの書で展開した山間の村々に対する江戸時代になつての眼差しを浮かび上げらせようとした力量については十分評価に値する。それだけに巻頭と最後に吐露した部分への切り込みこそ本来のこの書の目的であつたとして、次なる研究が実ることを期待したい。

五

すでに評者は以上の各ポイントでコメントを述べた。ここでは最後に若干のコメントを加えて終わりにしたい。

本書を全体構成としてみたコメントはすでに述べたが、個々の論考としてみると、新たな着想とともに、実に多くの先行研究や関連文献を渉猟し立論、展開している点は著者のすぐれた力量が十分あらわれたものとして評価したい。また文章力はやや文学的ふんいきが漂うが、すぐれた文才の持ち主であるように思われる。まだ若い研究者だけにその将来性を大いに期待したい。

それを認めた上で最後に一点、総じて本書はその目的上、既存

の研究文献に依拠して展開しており、フィールドワークでのドロドロした感じではなく、スマートさを感じるのも事実である。それだけに先行研究の引用や利用も幅広い領域にまたがるが、経済史や農村史、社会史、史学など関連分野の研究論文は概して研究対象の空間的位置づけを問題にしていないし、フィールドワークをベースとしていないケースが多い。したがって、それらを地域論として展開する地理学で援用する場合、十分な注意を払わないと虚像をイメージすることになりかねない場合もある。例えば、

本書でも引用文献から近世の遼州北部で植林が一般化していたかのような表現があるが、それはごく一部の篤林家の例外的局地的事例にすぎず、遼州の山地での植林が拡大するのは明治二〇年代を端緒にして同三〇年代以降にすぎない。それも本格化するのは戦後のことである。

以上、多忙の中で中断しつつ書き綴ったためマト外れの部分もあるかと思う。その点をご容赦いただきたい。最後にあらためて著者の今後のご活躍を期待して終わりとしたい。

(A5判、三六六頁 二〇〇二年十月 校倉書房 七〇〇〇円＋税)

(愛知大学教授